

平成 19（2007）年度「NGO 長期スタディ・プログラム」最終報告書

氏名：森川 悠太

日本側所属団体：（特活）21 世紀協会

海外研修先名：Permaculture Research Institute

研修期間： 2007 年 10 月 1 日 ～ 2008 年 3 月 7 日

研修テーマ：パーマカルチャー発祥の地であるオーストラリアにて、派遣先団体の活動、実務、研修に従事、またパーマカルチャーネットワークにも参加することにより、21 世紀協会の開発現場であるミンドロ島に適したパーマカルチャーデザインの提案

【研修期間全般を通じて行った業務および活動】

通常業務として、研修先団体の実験農場にてパーマカルチャー、農業の基本となる家畜、家禽の世話、畑及び森林の管理を他スタッフ及びインターンと共に習得。基本業務の習得と平行してパーマカルチャーの中軸であるデザインを座学及び実習を通して学ぶ。また、滞在期間中、研修先団体が開催するパーマカルチャーデザインコース（以下 PDC）に初回は生徒として参加。PDC は 2 週間でパーマカルチャーの基本概念から実践にいたるまで座学を中心に学ぶコースである。以後 2 回はそれまでに習得したことを活かし担当者、サポート役として参加。
また、不定期であるが他パーマカルチャー農場を訪問。パーマカルチャリスト、環境活動家、パーマカルチャーネットワークを利用し多くの人々と接する。研修最終日には PDC の生徒を対象にそれまでに習得したこと及び過去の経験を踏まえてパーマカルチャーの一つである”アイガモ農法”にについて講義。

【具体的な研修内容】

農場における研修であるため、上述したように通常業務は家畜、家禽の世話、畑及び森林の管理である。なかでも赴任 1 ヶ月後から担当したガーデンにおいて最も多くの時間を過ごした。264 m²と小さなガーデンであったが、パーマカルチャーの概念を学ぶには十分であったと考えられる。太陽光、風向き、降水量、土質、外敵、湿度、ロケーションとガーデンに影響を与えるすべての要素を考慮し、JICA の専門家としても派遣経験をもつ代表者と協議の上計画、実行にうつす。植え付け、散水、堆肥の製造から散布、雑草抜き、害虫のコントロール、収穫が主な作業である。研修最終月には Permaculture の Diploma 取得目的もかねて担当ガーデンに関するレポートを書き上げる。
多くの実習はガーデンにおいて行われたが、概念、思想、実践例などは PDC（座学）を中心に習得。コースでは海外、特に途上国におけるプロジェクトをモデルとして多く採用していたため、ますますパーマカルチャーの可能性を実感した。十分な下水施設が整っていないことから疫病が蔓延している地区へのコンポストトイレの搬入、砂漠地帯においてもスウェイル技術を用いることで見事に植林に成功した事例など所属団体の活動現場フィリピンにおいても活用できるものばかりである。
また、他パーマカルチャーサイトの訪問も重要な研修であったといえる。スケール、気候、降水量、周辺環境、資金、目的等が異なる他サイトの見学、研修は所属団体への還元という観点から大きな収穫であった。

【本研修の成果】

パーマカルチャーの基本概念、技術、活用術を習得できたことがもっとも大きな成果だと考えられる。アドミニストレーションではなく、技術面に特化した研修であったことを考えればこれ以上の成果はない。具体的な成果としては担当業務をもとに作成したレポートにより日本でも数人しか取得していないパーマカルチャーの Diploma を得ることができたことがあげられる。また、他スタッフ、代表者との協議をふまえた所属団体プロジェクトのデザインプランを作成できたことは組織への還元という観点においては大きな成果であった。加えて本点においては今後どのように活かすかが成果ともいえるが PDC、他サイトの訪問をとおして築かれた世界中のパーマカルチャリストとのネットワークも大きな財産である。研修期間をとおして個人的には英語力の向上にもつながった。

【研修テーマや本研修で求めていたことが達成できましたか。達成できなかった場合は、その理由もお書きください。】

本研修において求めていたことは概ね達成できたと考える。パーマカルチャーの基本概念から始まり最終的なデザインに至るまで現地での活動及び研修コースを通して多くの学びを得ることができた。唯一達成できなかった点としては、組織レベルでのネットワークの構築である。個人レベルでは世界中のパーマカルチャリストとつながり、実際に所属団体の活動現場であるフィリピン出身の方と現地事務所のネットワーク構築にも一役買うことができた。組織レベルに至らなかった理由として考えられることは、日常の業務におわれ、なかなかそこまで踏み込んだ活動ができなかったことに尽きる。

【本研修成果を自団体の能力強化にどのように活かそうと考えますか】

本研修の目的として組織の能力強化とあるが、私自身の研修は所属団体のプログラムの一つであるパーマカルチャープロジェクトに特化したものであったため、プロジェクトの強化が組織の能力強化につながると考えている。スケジュールの都合上、私自身が 21 世紀協会の活動現場フィリピン・ミンドロ島を訪問することはできないが、帰国報告会、ミーティング、業務引継ぎを通して、本研修において学んだことを次期赴任者に伝えた。また、滞在中に作成したパーマカルチャープロジェクトのマスタープランを軸に今後も現地スタッフと共に協議しながら活用していきたい。

【今後の課題】※本プログラムや事務局側に対する要望等でも構いません

私個人及び所属組織としては学びの還元が最大の課題である。ホームページの改善のように短期間で明確な成果が見て取れる類の研修ではなかったことから、継続的に現地スタッフとのミーティングを重ねて研修の成果を還元していきたい。本プログラムとしては第一回にあたる今回の研修をもとに事務手続きの向上を期待する。事実事務手続きに手間取り、研修に集中できなかった時期があったことは否定できない。また、会計処理だけでなく、研修内容へのコメント、改善点の指摘があればよりよいプログラムになると確信する。

ⁱ パーマカルチャーとは Permanent Agriculture もしくは culture の略語である。パーマカルチャーの基盤をなすのは、自然のシステムの観察と伝統農業に含まれている知恵(適正技術)、そして現代の科学的・技術的知識である。自然に逆らうことなく自然のシステムをスピードアップするよう農場、地域、ひいては社会をデザインしていくことで自然の豊かさと人間の生活の質をともに向上させる。